

一心寺かわら版

第五十一号 令和三年一月発行

持名山一心寺

検索

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。
旧年中は護持運営にご協力いただき誠に有難うございました。

コロナ禍、三豊市の病院でクラスターが発生し、不安な日々をお過ごしのことと思います。海外でワクチン接種が始まったのは明るい兆しですが、予断を許さない状況が続きます。互いを思いやり、乗り越えて参りましょう。

みなさまのご健康とご多幸を念じ上げます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。
南无阿弥陀仏

お寺の掲示板大賞二〇二〇受賞



一心寺の掲示法語が、一六七七作品もの応募の中から「フリースタイルな僧侶たち賞」を受賞しました。受賞作は「信じるはそのまますを受け入れられる自分がいること」。



二〇一八年の「君たちがいて僕がいる」(チャーリー浜)に続いての受賞。今回は芦田愛菜さんの映画「星の子」の完成イベントでのコメントをもとに造語。難しく感じるのではないかと思います。詳しくは既報「かわら版第五〇号」に掲載しております。これを励みに、より分かりやすく、仏さまの教えを届けられるように精進したいと思います。

秋季永代経報告

春は法話なしの内勤めだったため、久々の法要。九月二十六日、雨上がりの涼しい風が吹く中で納骨堂、本堂でお勤め。法話は、倉敷市・清楽寺住職の三木秀海氏。

私たちは手段と目的を間違えていないか。お金や健康は手段であって目的ではない。本当に大切なのは、人生を終えるときに「有り難い人生だった」と言えること。

この世は娑婆、耐え忍ばなければならぬ世界。人生は縁にしたがって苦難がやってくる。それは避けることはできない。

だからこそ、お念仏に出会って実りある人生を過ごしてほしいと仏さまは願われたい。とお聞きしました。

お知らせ

近年、遠方よりお参りの依頼が増えました。県内はもちろん、大阪、東京など国内各地へ出張しています。交通の便が良くなったため、ほとんどの地方へ日帰り、通夜・葬儀も一泊二日です。都合が合わない場合でも近隣の寺院を紹介することもできます。お気軽にお問い合わせください。



『鬼滅の刃』を仏教的に考えてみた

大ブームとなっている『鬼滅の刃』。アニメ映画「無限列車編」は興行収入三〇〇億円を超え、日本映画史上最高になりそうな勢いです。

『鬼滅の刃』は少年誌に掲載されていた漫画。二〇一九年にアニメ化されたことにより、その人氣に拍車がかかりました。当初は若年層にのみ注目されていたものが、次第に世代・性別を問わず多くの人の心をつかんでいきました。わが家でも子供たちが夢中になっていました。

ただ、凄惨なシーンも多いことから、映画はPG-2（十二歳未満は保護者の助言・指導が必要）に設定されており、小さな子どもに見せて良いかどうか物議をかもしています。

主人公の竈門炭治郎（かまどたんじろう）は、母と弟妹五人を鬼に殺され、ただ一人生き残った妹の禰豆子（ねずこ）は鬼になってしまいました。鬼の始祖・鬼舞辻無惨（きぶつじむざん）は人間を鬼に変えることができ、鬼は人間を喰らうことで強くなります。鬼を、無惨を倒すことを目的とするのが鬼殺隊です。炭治郎は禰豆子を人間に戻すために、鬼殺隊の一員となって、その方法を探りつつ鬼と戦い続けます。



大ブームの理由は？

この作品がなぜ大人世代も巻き込んだの大ブームとなったのか。多くの方がその理由、魅力について考察しています。

青山学院大学准教授・森島豊氏は、

「物語そのものに、現代人が抱える問題と、それに応えるメッセージがあるのではないか」

とおっしゃいます。その視点から読み解くと、『鬼滅の刃』の物語には、仏教に通じるものがあるのではないかと感じました。

『鬼滅の刃』の登場人物の多くは、幼少の頃から不条理な体験をしています。鬼殺隊員も鬼になった者も、家族を殺されたり、劣悪な家庭環境に苦しんだりしています。

森島氏は、

「この物語が向き合っている世界がある。その世界を象徴しているのが『どうでもいい』という表現だ。…不条理が人々に自暴自棄的な思いをおこさせる。『誰も必要としていない』。『生きていて、ごめんなさい』。この思いをどうすればいいのか。『鬼滅の刃』の爆発的人氣の裏には、『どうでもいい』を克服したい読者の期待に応えた側面がある」と考察されています。



さらにその奥には、物語の初期に鬼殺隊の柱・富岡義勇（上）が語った言葉「弱者には何の権利も選択肢もない。ことごとく強者にねじ伏せられるのみ…それが現実だ。」

に投影された、現在の弱肉強食の世界を逃れたいという願望があるように思えます。

「どうでもいい」「か」「どうでもいいことなんてない」「か」

仏教では、この世は生老病死、諸行無常と説きます。すべてのものごとは因と縁によっておこり、移り変わっていきますから、不条理に感じることもおこることもあります。

今年、新型コロナウイルスの感染拡大によって、これまでの生活から大きな変化を強いられ、不条理な世界を強く感じた方も多いことでしょう。そして、弱肉強食の世界では、どうしても弱者が多くの不条理に襲われざるを得ません。その時に、もう「どうでもいい」と思ってしまうこともあるでしょう。この「どうでもいい」という気持ちは、浄土真宗の開祖・親鸞聖人のおっしゃる「空しく過ぐる」に繋がるように思います。どうでもいい人生は空しいことではないでしょうか。

「どうでもいい」と思うとどうなっていくか。自らのことがどうでもいいなら、当然のように他人もどうでもよくなってしまっています。

仏教の開祖・お釈迦さまはおっしゃいます。

すべての生きものにとって生命は愛しい。自分の身にひきあてて、殺してはならない。殺させてはならない。 (『ダンマパダ』)

この論理は自らの生命が愛しいという前提で成り立っています。愛しいとは感じない、どうでもいいという人は、いのちは大切であるということが分かりません。

炭治郎(上)は「どうでもいい」と言う鬼殺隊の少女・カナヲに語りかけます。

「この世にどうでもいいことなんて無いと思うよ。」

「どうでもいい」と言う者も、心の奥底では、どうでもいいのは嫌だ、何か手応えを感じたいと願っているのではないのでしょうか。不条理な出来事に耐え切れずに鬼

になった者も、不条理を受ける弱者ではなく、強者である鬼になることで何かを得ようとしていたのでしょうか。

鬼はどのような存在か

鬼は不条理なことへの怨みを、社会に、人間にぶつけてきます。鬼殺隊員にも大切な人を殺されて鬼を怨んでいる者もいます。しかし、それ以上に、悲しむ人をこれ以上増やしたくない、守りたいという思いを強く持っています。

映画で大活躍した鬼殺隊の柱・煉獄杏寿郎(れんごくきょうじゅうろう・下)は、列車に乗る人間を一人も殺させないと奮闘し、命を燃やし尽くしました。

炭治郎は、敵である鬼にすら優しさを向けます。不条理な出来事に耐え切れず鬼になってしまいました。鬼も元は人間。心の弱さから鬼の手先になる人間も登場します。炭治郎は、彼らも自分と変わらない、「どうでもいい」とは考えません。

親鸞聖人は、

どんなことでも自分の思い通りになるのなら、浄土に往生するために千人の人を殺せとわたしがいったときには、すぐに殺すことができるはずだ。けれども、思い通りに殺すことのできる縁がないから、一人も殺さないだけなのである。自分の心が善いから殺さないわけではない。また、殺すつもりがなくても、百人あるいは千人の人を殺すこともあるだろう。

(『歎異抄』)

とおっしゃいました。

縁があったならば誰もが人を殺してしまう。私たちも不条理な出来事が縁となって鬼のような存在になってしまう可能性があるのです。



本当の優しさ・仏の本願に出会うと

その鬼たちが、最後に炭治郎の優しさに触れます。すると、その昔、誰かから注がれていた愛情を、誰かに対して持っていた愛情を思い出し、救われていきます。自分は「どうでもいい」存在ではなく、かけがえのないのちであつたと気づき、他人もどうでもいいものではなく、大切ないのちであると思に至るのでしよう。

森島氏は、

「現代人が求めているのは、失敗してもいい、間違うこともある、それでも「見捨てない」「投げ出さない」という心との出会いかもしれない」とおっしゃいます。

鬼になった者は、鬼舞辻無惨(下)に出会ってしまい、道を間違ってしまった。そして、道を踏み外してしまった私をも見捨てない炭治郎の優しさに出会って、救われていきました。



浄土真宗のご本尊・阿彌陀如来は

わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの国に生まれたいと願い、わずか十回でも念仏して、もし生まれることができないうなら、私は決してさとりをひらきません。(『仏説無量寿経』)と誓われました。

浄土真宗では「悪人正機(あくにんしょうき)」、悪人こそ救いの目当てと説きます。煩惱をもった私は自らの力では迷いの世界を離れられません。そのような私を、阿彌陀如来は見捨てることなく浄土へと携め取ってくださいます。そして、その浄土とは「無量寿」「無量光」、かぎりないのちと

光の世界です。

映画には、炭治郎の精神世界が描かれています。澄んだ明るい青空、暖かい光、自らを殺しに来たものさえも優しく包み込む世界。その表現から浄土を思い起こしたのは私だけででしょうか。

炭治郎は菩薩？

阿彌陀如来にとって、私は「どうでもいい」どころか、どうしても救いたい大切ないのちです。その願いが私に向けられていると気づくと、安らぎます。その願いはかぎりないのちと光となって私たちに届けられています。

親鸞聖人は、

如来(仏)の本願に出会ったならば、人生を空しく過ごすことはありません。(『高僧和讃』)

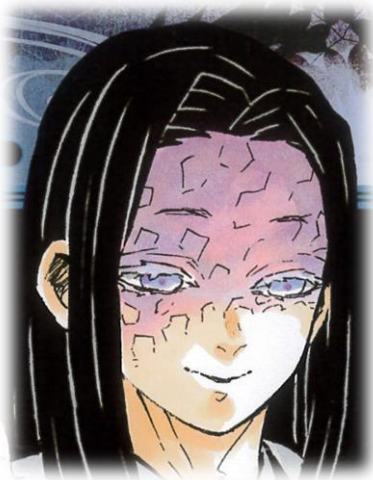
とおっしゃいました。

その仏の願いを私の願いとして歩む者を菩薩と呼びます。

鬼殺隊を率いる産屋敷耀哉(うぶやしきかがや・左)は語ります。

「永遠というのは人の想いだ。人の想いこそが永遠であり不滅なんだよ。」

その願いは、千年脈々と流れて、炭治郎まで続いています。まるで如来の本願のように。炭治郎は愛しい人を守るために戦います。そして、鬼になった悲しいのちの安穩を願います。その姿は菩薩のように見えてきます。



『鬼滅の刃』は、私たちの世界を投影した、そして、心の奥底で求めているものを表現した「いのちの物語」なのかもしれません。